

2012年度アジアフィールドワーク（北京）を引率して

浅野 純一

9月3日から一週間、北京にフィールドワークに行った。今年度は、参加者9名という最低催行人数であった。この人数であったので、かなりこまめに学生には対応できたと思う（それがレポートに反映できているかどうかは「微妙」ではあるが）。天候も、行動に支障を来すほど崩れることはなく、初秋というにはまだ暑かったが、それでも機嫌良く過ごすことができたのである。

周知の通り、4月に石原元東京都知事が。尖閣列島買い上げをぶち上げ、それに呼応して、8月に香港の活動家が尖閣諸島上陸という事件があり、中国でも反日デモが組織されていて、いささか不安もあったのだが、北京在住者のツイッターなどを参考にした限りでは、きわめて平安であったようである。事実、3日～10日の滞在期間中、これといった兆候はなかった。

中央民族学院を訪問したのは、7日であったが、接待してくれた先方の先生が、よくぞこの時期に来てくれました、と喜んでくださったのが印象的ではあった。表面的には分からないが、やはりなにがしかの雰囲気があるとくにエリート大学などでは潜行しているのだろうか、とこの時ばかりは感じた。

そして、われわれの帰国当日、9月10日に日本政府が尖閣諸島国有化を決定して、15日には大規模なデモが北京でも発生した。日中関係が一気に悪化していった。

もっとも、北京でのデモは主に大使館周辺だけで、日本人が襲われるというようなこともなかったけれど、帰国後にさまざまなメディアによる映像を見ると、ぎりぎりセーフ、という感想を抱かざるを得なかった。

滅多なことが起こるとは思えないが、それでも学生が不愉快な目に遭う可能性はあっただろう。何より保護者の方々の理解が得られない。そういう意味でぎりぎりセーフであった。今後はこうしたリスクも勘定にいれた立案と実施体制を考えなければならない。

また、今回の参加者のテーマは、それぞれのレポートを見ていただければいいのだが、映画、マンガなどをテーマにしたものもいたけれど、衣食住にかたよっている。別にそれが悪いわけではないし、経年的変化でも観察することができれば、学術的価値も出てくるのであろうが、学生にそれを求めるのはやや荷が重い。また、衣食住とはいえ、短い間に観察調査できる範囲といえ、勢い店頭に限られてしまう。

学生自身にテーマ設定を任せてしまうと、どうしても身近な生活の



都市博物館の北京鳥瞰ミニチュア

中から、無難なテーマを選んでしまう。むろん個々の学生からみれば、それなりに新しい発見であり、先輩の作物、つまりこの『観光学年報』に掲載されたレポートの要約よりはだいぶ細かに調べたという気になれるだろう。しかし、要約してみると、先輩の作物といたして変わらないことになる。

それはそれでいいといえどそれまでだが、毎年似たようなレポートが生産されるというのは、教師からみればあまり面白くないことになる。対外的にも、たとえば高校教師やさらに高校生に見せる場合でも、やはり昨年のもので似たり寄ったりでは、面白くない。

で、考えてみたが、一つは、すぐれたレポートはそのまま本誌に掲載することである。参加した学生には、ほぼ8000字（原稿用紙20枚）のレポートを課しているわけだが、毎年なかなか面白いレポートを書く学生がひとりや二人はいる。それをそのまま、写真も含めて掲載するのである。その方が読み応えがある。写真も、カラーがふさわしいときは、カラーのページに掲載する。学生も書く甲斐があらうと思う。選に漏れたものは従来通りでいい、よいレポートを書けば楽ができる（要約を作成しなくていい）ことをもって、レポートへのモチベーションを高めるというのは邪道であろうか？

二つは、テーマの設定について、教員の側からある程度枠を決めるということである。来年度の北京のフィールドワークも筆者が担当予定であったので、「博物館」という大枠を決めていた。世界中、大都市には多くの博物館がある。北京も例外ではない。学生には自分の興味にしたがって、テーマを決めさせ、それに関係する博物館を探させる。もちろん教員が援助・助言をする。その博物館への行き方、交通手段も調べる。展示内容も分かる範囲で調べる。その博物館自体の設立の経緯など調べる。現地に行く前に具体的なターゲットを設定できるわけだ。しかも、中国の博物館の多くは、館内での撮影を許可している。そういう計画を立ててみた。残念ながら、来年度の北京行きは成立しなかったが。

13年度は北京と韓国でのフィールドワークが、参加希望者が最低催行人数に足りなくて取り止めとなった。東南アジアコースと南京の中国語現地演習の二つのみ、参加者数はいまのところ合わせて20人に満たない。アジア学科の見地体験型の授業は、危機的状況と言えよう。



鉄道博物館の展示、19世紀上海の機関車

だが、最近の学生が海外に出たがらない、という傾向は本学だけではないようだ。同業の友人知人からも同じような声が聞こえてくる。国を挙げて「グローバル」を言い立てているにもかかわらず、笛吹けど踊らず。

愚考するに、明治以来の「国際化」が（東アジア的な）鎖国を脱して世界を認識し、そのことを通して自己（自国とその社会）を定立するという営みであったのに対して、いまいわれるグローバル化は、たとえば多国籍企業の営みなどをみれば分かるのだが、身もふたもない世界の均質化にその本質

があるのだ。国際化は、それぞれの国の特色を活かして財を生産し、貿易によってそれを交換することで世界の秩序を作り出してきた。まあ、先進国による途上国の「搾取」でもあったのだが。ところが、グローバル時代になると、どこであれ、賃金の安い土地でものを生産し、世界に同じものを売りさばく。中国人であれ日本人であれ、アメリカ人であれ、品質さえ同じであれば場所も人種も国籍も問わない。世界的な規模で、「同一労働同一賃金」を最低水準で実現しようとする。たちの悪い冗談みたいだが、冗談ではない。

というようなことを、若い人たちは無意識のうちに感じているのではないか、と思う。

グローバル化した企業は、英語が（中国語も）できて、企業命令で世界中どこにでも出かけていく優秀かつ安価な（数値でもって「質」的保証された）「グローバル人材」を求める。学生は英語を（中国語も）単位のためには勉強するが、できることなら海外で使い捨てにされるよりは、たとえ貧乏でも日本の国内にとどまりたい。覇気などなくとも、つましい生活ができればそれでいい、その何が悪い、と。

若年者人口が減少することがすでに確定している中で、企業が求める人材の育成と、学生が求める将来の生活との間で、われわれ大学に関係するものは終わりのない悩みを悩まなければならない。企業が必ずしも社会とイコールではないけれど、社会の中で大きな存在であることは否めない。

一方で、農村に行ってほそぼそと農業や林業に従事する若者も増えているという話を、各地の「村おこし」「町おこし」の報告としてちょくちょく聞く。個人的にはそういった若者に希望を繋ぎたい気がするのである。そんな若者に受け入れられるフィールドワークの授業も考えていいような気がする。